

—民族のころ(137)—

チベットの笑い話 (1)

星 泉

チベットには他人をからかうタイプの笑い話がたくさんあります。田舎の人をからかう話や、地位の高い人や聖職者を皮肉ったりあざ笑ったりする話、外国人の失敗を笑う話など、対象は様々です。ここではその一部をシリーズで紹介していきたいと思います。

第一回目は、八世紀に建立されたチベットの最も古い仏教寺院サムイエ寺の神託官の笑い話をご紹介します。チベットの人々の奔放な男女交際の様子がちらりと垣間見える話でもあります。

『神託官様に会いたいの』*

昔チベットに、サムイエ寺の神託官というお方がおりました。その神託官はチベット政府の僧官で、収入も多く、寺の中でも特別扱いでした。この神託官はたいへんおしゃれな伊達男で、そのうえ女好きで浮気者としておりました。

ある時、彼はラサにやってきました。ラサと言えば、街をぶらついている浮ついた娘がたくさんいますよね。神託官はそういう娘を連れ込んでこんな風に言ったそうです。「今日はあまりゆっくりできないんだが、今度チベット暦五月にはサムイエ寺の経蔵供養のお祭りがあるから、そのときは必ずおいで。そうすればゆっくり過ごせるからさ。」彼はいろんな娘にこんな風に言って歩いていました。

娘たちにとってみれば、サムイエの神託官は若くてハンサムだし、有名だし、その上、サムイエ寺というのは吐蕃王国の時代、ティソンデツェン王の時に、バドマサンババが建立なさったありがたいお寺です。そう思うと娘たちは神託官どうしても会いたくなってしまいました。それで娘たちは彼の言葉にかこつけて、次々にサムイエに出かけて行きました。

さて、サムイエに着いて、いよいよ彼に会いに行こうとしたのですが、まったく会うことができません。というのも、経蔵供養祭というのは、サムイエ寺の大変重要なお祭りなので、ラサから政府の僧官、俗官がたくさんお見えになります。神託官は、そうした方々のご案内役を務め、接待しなければなりません。彼はそっちの方にかかりつきりになってしまったのです。他にも地方の知事だとか寺の後ろ盾など、地方の有力者たちが集まってきました。彼はそうしたお歴々の接待ばかりしていなければなりませんので、娘たちに会う時間など到底取れませんでした。そういうわけで、娘たちは彼に全く会えずにおりました。

ほどなくして経蔵供養が始まりました。

経蔵供養の時は、護法神のツイマラが神託官に憑依して、ご託宣を下さるという行事があります。娘たちはと言えば、神託官に会いたくて来たものの、互いにそうとは知りません。大勢の娘たちが口をそろえて「サムイエにお参りに来たの」とか「サムイエ詣でにきました」と言うのですが、皆「神託官様に会いたいの」とは口に出しませんからね。ともかく娘たちは、護法神を拜みに行けば、護法神が憑依している間は神託官に会えるのです。それを期待して、娘たちはずっと待っていました。もうサムイエに来てから数日が経っていました。

さて、いよいよ憑依が始まりました。神託官は以前「今度サムイエにおいでよ。ゆっくり過ごせるからさ」などと呑気なことを言いましたよね。今度こそゆっくり楽しめるんじゃないかしらと期待していた娘たちは、護法神が憑依している真つ最中の神託官にこんな風に言いました。

サムイエを思ってきたんじゃないの 護法神様を想って来たの
サムイエの大護法神様 どうかお告げをくださいな

たくさんの娘たちが、口々に護法神様にこんな風にお願いをしたんだそうですよ。
ラサの人たちはサムイエの神託官をからかって、こんな笑い話をしましたとき。

(語り：チャクター・ソナムチュンペー、民話採集：星実千代、訳：星泉)

*この笑い話は、1990年に東洋文庫から出版された星実千代氏収集のチベットの民話集“Texts of Tibetan Folktales VII”の第8話を訳出したものです。